

談話室

病名目録と私(1)

梶^{かじ}原^{わら}敏^{とし}宏^{ひろ}

はじめに

振り返ってみると病名目録の編集は、私の若い時代、昭和33年～48年まで15年間関与した最も大きな学会活動で、今でも多くのことが思い出される。その係わりを私自身の視点で整理してみた。今後の植物病名の整理やデータベース化の作業に少しでも役に立てば幸いである（なお私の視点で取りまとめた概要は、病名目録の重要な編集資料と共に、小平市にある日本植物防疫協会資料館に保管を依頼してある）。

病名目録整理の経緯とその背景

病名目録整理の経過については、病名目録第1巻の初版の序文に当時の吉井 甫会長が、また第2巻初版の序文に堀 正侃会長が述べておられる。また田杉平司氏も詳細に記述しておられる（日植病報31巻記念号：1～6, 1965）。これによれば、病名統一は大正6年4月の総会ではじめて提案され、西田藤次、石川滝太郎の両氏が委員に推薦された。その後、この両者により参考案が提出されたが、大正12年9月1日の関東大震災のため原稿が消失し、一時中止となった。昭和9年4月になって再び病名整理統合が評議員会で取り上げられ、北大 富士貞吉氏に調査資料の作成を依頼。昭和12年3月に提出された資料を「有用植物病名調査」として印刷。これを中心に昭和18年まで毎年審議が重ねられたが、第2次世界大戦のため中断。昭和32年に審議促進が提案され、33年に病名調査資料編輯小委員会を設置、委員が専門的に分担して審議を続けた、とある。

日本植物病理学会は、昭和9年に会報を年4回発行することを機に、会報の発行、会費の徴収など学会事務全般を養賢堂に委託、この状態は戦中、戦後まで続いた。しかし、昭和26年以降は大会での講演数も100を超えるようになり、会員数も急激に増加したため養賢堂では会員の動静、会費の納入状況など十分把握できなくなり、会の運営に支障をきたすようになった。このような情勢に対応するため、養賢堂との全面的な事務委託を解

消して、事務全般を会員の多い西ヶ原の農業技術研究所（以下、農技研）に移し、学会誌の発行は34年度24巻から学会が直接行うことになった。農技研ではこれを受けて、新しい体制づくりが模索されていたが、病名目録の編集に向けての審議が促進されていた時期と重なる。

私が病名目録に直接関与するようになったのはこの時期で、西ヶ原の農技研に採用（昭和27年）され5年ほど経過してからで、新しい体制づくりの一環として、昭和33年から山中庶務幹事長の下で庶務幹事として学会活動に関与するようになった。その活動の一環として病名目録の編集・印刷の手伝いをするようになったのが始まりである。それ以前、すなわち昭和32年に病名目録審議の促進が提案された時点での具体的な活動は、直接関与していなかったこともあり定かではないが、関連する資料その他で推察すると次のようである。

病名目録審議のための原案は、昭和12年3月「有用植物病名調査」として印刷されたものである。この「調査」は、昭和9年に評議員会が北大富士貞吉先生に依頼し作成されており、富士先生を中心に村山大記先生などの大先生が、各作物の病原ごとに病名の出典を実に丹念に調べて記載し、取り纏め印刷されている（この印刷物は、目録編集の途中から、明日山先生から譲り受け、編集の過程で大いに利用した。現在、植防資料館に他の目録関係の資料と共に保管を依頼してある）。

この原案を基に、その後審議され追加した病名や病原名の改変なども加えて謄写刷の印刷物とし（昭和29年？）各委員に配布。さらに、追加や病原名の変更などについて意見を集約、これを基に委員が、熱海のホテルに泊まり込みで集中討議・検討している（正確なことは不明だが、当時の私の研究室長岩田吉人氏から、熱海会談と称しその概略を伺った）。熱海での集中討議の模様についての記録は見当たらないが、ここでそれぞれの分野の担当を決め、各委員が討議の結果を集約、さらに印刷のための原稿として病害ごとに病名の出典、学名などを文献カードに整理・記載し、それを事務局に集め印刷原稿を作成することになった。この印刷原稿作成の役割が私に課せられたのは、昭和34年（1959）の新年早々だった。

病名目録の分冊と出版経費

病名調査整理はそれぞれの分担を決め全作物について同時並行的に進められたが、印刷の際のボリュームの関係もあり、食用作物・特用作物を第1巻として昭和35年に先行出版することになった。出版の経費については、当時の「日本特殊農薬製造株式会社(略称:特農)」が全額負担することになった。その経緯の詳細な話は明らかにされていないが、私の知るところでは同社は当時、いもち病の防除剤として使用された有機水銀剤「セレサン石灰」やニカメイチュウの防除に卓効を示した「パラチオン」の販売で業績極めて好調であったので、これらの開発研究・普及に貢献した学会に対しお礼として寄附したい、との申し出が同社の顧問をされていた田杉平司先生を通じてあったことによると推察される。あるいは田杉先生からこのような話があったので、これらの農業に関係の深い食用作物を柱とし、適当な量になるよう特用作物を組み合わせて先行印刷することになったのかも知れない。

ともかく、病名目録第1巻の初版は「特農」が印刷経費の全額を負担して発行され、当時の会員全員に無償で配布された。この厚意ある寄附については、序文、奥付などに一切記されていない。田杉先生からその必要は全くないという話があったのかも知れないが、今考えるとそのことを明記しておくべきではなかったかと思う。今となっては、この事実を知らない人のほうが多くなっているのではないだろうか。なお、学会創立50周年記念行事の一環として、昭和40年2月および3月に出版された病名目録第2巻(野菜および草花)と第3巻(果樹および林木)には、50周年記念事業特別賛助会員、財団法人報農会、日本抗生物質学術協議会の協力が明記されている。

病名目録第1巻編集経過の詳細

このような経緯を経て食用作物・特用作物を第1巻として先行印刷されることになり、昭和34年の年明け早々から印刷のための整理を始めた。当初、機械的に整理すれば印刷できると気軽に考えて整理を始めたところ、食用作物はともかく、特用作物の印刷用の原稿カードは全く使い物にならないことが判ってきた。特用作物の検討・整理を担当されたのは、この分野ではご高名の某先生だった。確かに繊維作物などでは、ご自身が新しく同定・命名された病害も多かったが、殆どの病害の病名の出典に関して福士先生の下で調査された出典、あるいは謄写刷をもとに追加・訂正した出典などを無視し

て、病名の出典としてご自分の著書名を挙げていた。これをどう取り扱うか、身近におられた評議員で病名調査に係わった数名の方々にカードを提示してご意見を伺った。その結果、送り返して調べ直し、書き改めることをお願いするのも一つの選択肢であるが、送り返しても当初の意図に沿ったようにはならないだろうとの意見が圧倒的で、これまでの資料をもとに私のところで調べて改めてほしいということになった。そしてこの時点から本格的に病名調査にのめり込むことになった。

このような結果になった原因の一つとして、病名調査資料編輯小委員会等で専門的立場から検討し、意見を聴取したものの、最終的に誰がどのような形で取り纏めるか不徹底のまま原稿作りをそれぞれ分担依頼したためではないかと思われる。

病名統一の目的は、第1巻の序文にも示されているように、病名は学名と異なって命名規約もなかったので、同一病害に対しそれぞれの研究者が、違った名前を付けていた。極端な場合は、同一の人が異なった著書の中で違った病名を付けた場合もかなりあって、病原名を挙げないとどれがどれか判断できないものがかなりあった。私の恩師である吉井先生が作物病害図編を改訂(養賢堂、1957)されたとき、どれを正式の病名として取り上げたらよいか苦労したと云われていたことを思い出す。

もっとも、病名統一に対する要望は、分類を専門にする先生方はあまり積極的でなく、学名がしっかり付けられていれば病名にはそれほどこだわらないという立場の先生が多かったように思われる。要望が強かったのは、普及に携わる人、指導的立場にある先生方であったようだ。このようにそれぞれの立場によって病名統一の意義の受け止め方が多少異なっていたので、明瞭な基準がなければ揃った原稿を望むことは、始めから無理があったのかもしれない。

ともかく、既に述べたような経緯で本格的に病名目録第1巻の編集を進め、印刷に向けての活動を始めたのは、昭和34年の後半になってからだったように思われる。福士先生の下で取り纏められた「有用植物病名調査」およびその後の検討資料を参考にしながら、特用作物とくに繊維作物関連の原稿を中心に出典の洗い直し作業が始められた。幸い西ヶ原の農技研には、吉野文庫と称し古い病害関係の図書が保管されていたので、これらを借り出して自分の机の上に積み上げておき、必要最低限の研究活動以外は、殆どこれに掛かり切りになった。

病名整理の過程で生じた問題点

◆ 病名の呼称

いよいよ原稿の整理を始めると、統一して処理しなければならない問題が次々に出てきた。小さな問題は、近くにおられた岩田さんや東大の明日山先生その他にお伺いし、ご意見に従って処理したが、共通する重要な問題については委員会を開いて検討処理した。昭和33年当時準備の段階で、細菌や線虫による病害について、斑点性細菌病、細菌性斑点病、あるいは線虫心枯病などについては、まず性は削除し、細菌や線虫は最後に付けて斑点細菌病、柄枯細菌病、あるいは心枯線虫病などのように統一することで委員の間で合意が得られて作業が進められていたが、未解決な問題も多かった。

まずウィルスの病名である。これは委員会で討議して頂いたが、そもそもウィルスという呼び名がおかしい、バイラスあるいはピールスとすべきであるという意見や、タバコのキュウリモザイク病をどうするのか、作物名を付けなければ、単にキュウリモザイク病ではキュウリの病害と誤解されるのでタバコは是非付けるべきだ。その際、タバコキュウリモザイク病とするかタバコ/キュウリモザイク病、あるいはタバコ・キュウリモザイク病とすべきであるとする意見があった。他方、キュウリの病名とする場合、キュウリ・キュウリモザイク病とするのは抵抗があり承認できないとする委員もあり、意見が真二つに分かれなかなか決着がつかず半日以上、この問題だけで堂々巡りの議論が続けられたこともあった。この問題は結局、タバコのキュウリモザイク病という表現の形式をとることにし、病名として作物名は重ねて用いないことでようやく決着がついた。

◆ 病名の表記と漢字

次に病名表記の問題である。当初の議論の中には、病名は全て片仮名で表記すべしという意見もあったようであるが、私の手元に原稿が届いた段階では外来語と区別する意味もあり原則漢字で表記するという事になっていった。ところが当時は漢字の使用はどの分野でも当用漢字(のちに常用漢字)に限るという強い文部省(国語審議会)の意向があり、当用漢字にないものは仮名書きとすることになっていた。しかし病名に頻繁に使用される「褐」「斑」「萎」は当用漢字ではなく、これを平仮名にすると病名の多くは、かっぱん病、はん点病、いちよう病などという表記になる。斑の代わりに班を、萎の代わりに委を当てるとする意見もあったが、これでは何のために漢字にするのか、本来と違った意味になるということもあり、使用頻度の高い前記の3文字は、当用漢字外

だがあえて使用するということに踏み切ることにし、強引に委員会の了承を得た。

その後漢字の使用について文部省は専門的な分野では必要に応じて当用漢字以外でも使用して差し支えないという若干軟化した態度になった。また当用漢字から常用漢字と若干位置づけが変わったことも考慮して見直しが行われ、新しく常用漢字となった漢字などが加えられた。第2版では「稿」も復活、最近では炭「疽」病なども復活して正式に用いられるようになった。最近では、コンピュータの発達によって特殊な文字でも容易に表記できるようになり、常用漢字にこだわる意味も薄れてしまった。

病名の表記については、人によって様々な意見があると思うが、私は個人的には病名は出来るだけ漢字を用いるべきであるという意見である。その際とくに常用漢字にこだわる必要はないように思っている。常用漢字が不変であるならばともかく、常用漢字を用いることを原則としたとき、追加や削除が行われるたびごとに変更しなければならぬ、とすると専門的立場から使用したほうがよいと思われるものについては、積極的に漢字を用いるべきだろう。

コムギの「から黒穂病」などは、～から黒穂病、あるいは～によって黒穂病という意味にとられかねない。稈黒穂病としたほうが病名としての収まりもよい。また、「煤」病、「煤」紋病、「条」葉枯病、葉「鞘」網斑病、「柄」枯病などは漢字を用いてもよいのではないだろうか。

◆ 学名の Author name

学名の表記については Author name は Full name とすることで作業が進められていたが、担当する委員によってはこれが徹底せず当時使われていた省略名で表記されていた。DC (de Candolle), B. et B. (Berkeley et Broome), E. et E. (Ellis et Everhart), B. et C. (Berkeley et Curtis), B. et J. (Bitancourt et Jenkins) などがあり、当初面食らった。分類が専門の人であればすぐ見当がついたと思われるが、駆け出しの分類など研究した経験もないものにとって、はじめは Full name は一体どうなっているのか見当がつかず、大変困った。その都度、この人の Full name はと聞くわけにもいかず困り果てた。

誰かに教わったというはっきりした記憶はないが、Ainsworth : Dictionary of the Fungi に Author name とその省略の仕方があるのを知り、以後それに依ったが、収録されていない Author もあり、個々に調べて対応したが結構時間を取られた。もっとも、1965年に発行した第2巻以降では、1960年に USDA から出版された

Agriculture Handbook No.165. Index of Plant Diseases in the United States の巻末に Lists of authors of plant-parasite names ; recommended abbreviations がありこれに大部分の Author が収録されていて、この利用により全く問題なく実現することが出来た。

◆ 病名の出典

出典については、その病名が付けられた最初の出典を原則として表記することにし、まれに学名の出典など記載されたものについてはそのまま収録した。出典については掲載雑誌等の頁数など、誤りを防ぐために逐一確認すべきであったが、時間の制約もあり、その余裕は全くなく、少々怪しいと思われるものについてチェックする程度で、今でも間違いが時々指摘されている。このような情勢のため、学名の出典については殆どチェック出来ずに印刷する結果となった。

出典について困ったのは、記載はされているがそれがどんな学術誌なのか判らないものがあった。例えば、澤田兼吉：台菌調報 1 である。分類の専攻者は別刷も所持していてとくに奇異には感じられなかったと思われるが、未経験の私には見当がつかなかった。それは台湾産

菌類調査報告が正式名で 1 ～ 11 までであることは判ったものの、さて何を見ればよいか長い間判らなかつた。そのうち 1 については、台湾農試特別報告 19 号であることが判りそれを記載した。台菌調報は厄介なことに号によって掲載誌名が異なり、台湾中研農業部報告、台湾農試報告、あるいは台湾大農特別報告などで、1919 年から 1959 年にかけて報告されている。

昭和 34 年の初めに開始された印刷のための編集作業は、このような経過を経てようやく 1 年後に印刷所に送り込めるようになった。印刷所は当時学会報の印刷をお願いしていた共立印刷で行うことになったが、何しろ内容が複雑で、活字も多様であったため植字・組版には印刷所も苦勞されたようだが、責任者であった秋山幸男氏には大変お世話になった。昭和 35 年 4 月からは、私は学会の庶務幹事長に就任したこともあり、多忙な日々を送りながら校正を行った。ただ、私自身未熟であったため、経験者にチェックをお願いしたものの、誤植が多く後で正誤表を印刷して大量に訂正する羽目になり、今眺め返すと恥ずかしい思い出が蘇ってくる。

(次号に続く)

■ 訂正とお詫び：

64 巻 1 号 38 ページ図-2 に誤りがございました（下線部）。お詫びして下記のとおり訂正させていただきます。

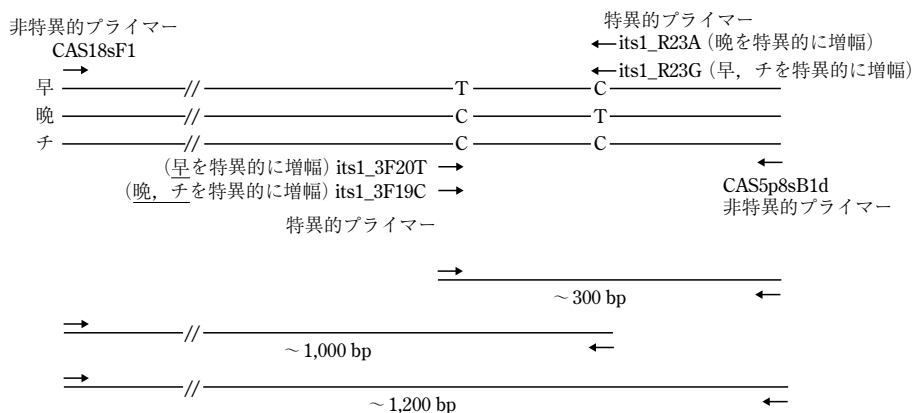


図-2 アリル特異的 PCR によるチュウゴクオナガコバチ (チ), クリマモリオナガコバチ早期羽化型 (早), 同晩期羽化型 (晩) 検出の原理